Japanese Association for Religious Studies

『宗教研究』85巻4輯（2012年）

Indigenization, Inculturation から Interculturation へ

中道基夫

〈論文要旨〉 宗教間対話は今日のグローバル化した社会、危機に直面した社会における平和の構築にとっては欠かせないものである。

しかしながら、キリスト教は宣教の宗教であり、宣教において、自己の真理の唯一性を主張してきた。そのような特質を持つ宗教にとって、そもそも宗教間対話は可能なのかという疑問が残る。また、宗教の真理をも凌駕するスーパー・イデオロギー（天皇制帝国主義）が宗教を抑圧しつつ人間の絆を広め、強めていったことを忘れてはならない。

キリスト教が自己のアイデンティティーを失わず、かつ他宗教との対話と協働を強めていくためには、新しい宣教の神学が必要である。キリスト教宣教学は宗教の神学の発展と共に、そのキーワードを Indigenization, Inculturation, Interculturation へと変えてきた。Interculturation に宗教が創りだす人間の絆の可能性と新しい神学への挑戦を見る。

〈キーワード〉 Indigenization, Inculturation, Interculturation, 宣教、宗教間対話

はじめに

宗教が創りだす絆ということを考える時、同一宗教内、もしくは宗教団体内の人間の絆を深め、その宗教共同体に人々を招き入れることが考えられる。そこには、ある親しい交わりの場が形成される。しかしながら、そのような内向きな共同体形成は、自己充足的な共同体にとどまるものであり、社会の中で宗教の孤立化が起こってくるこ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

とが考えられる。むしろ、そのような閉鎖的な共同体形成から脱却し、宗教間対話や連帯を通して、その中で人間の絆を創りだすことが考えられなければならない。

しかし、宗教の枠を越えた絆への模索とキリスト教のような宣教を第一義的なこととして考える宗教の共存ははたして可能なのであろうか。

キリスト教は宣教の宗教であり、その教会の設立から、宣教するということが第一義的なこととして理解されてきた。「大宣教命令」といわれる

わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だからあなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる　（マタイ二八・一八―二〇）

というイエス・キリストの言葉は、教会の中で全世界を宣教へと駆り立てる言葉とし語り伝えられてきた。[1] 宣教においては他宗教者との共存、他宗教者との連帯が目標とされたわけではなく、むしろ他宗教者の改宗が根本理念として考えられてきた。

しかしながら、今日においては、キリスト教の中でもこの宣教理解そのものが批判的に検証され、とくに欧米における第二次世界大戦下におけるユダヤ人虐殺やキリスト教とイスラム教との衝突による様々な紛争やそれを背景に持つ戦争を経験した中で、他宗教を否定し、宣教の対象と見なすことから脱却し、「対決から対話へ」[2]というスローガンのもと、宗教界の対話と共生はキリスト教における中心的テーマをなってきた。[3] 特に、世界平和や暴力の克服への取り組みを考えるとき、宗教間の対話と連帯は不可欠のものである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ただ一方で、世界平和に資することにキリスト教のミッションがあることは、十分に理解しつつも、やはり宣教の宗教という一面を持ち、イエス・キリストにおける救いの絶対性を信じるキリスト教においては、宗教の創りだす絆ということを考えるときに次のような疑問が残っていく。

・宗教の壁を越えて絆を創りだしていくことができるのか。

・なにが絆を創りだしていくのか。

・キリスト教宣教と宗教間の絆との関係。

・宗教間の絆は各宗教になにをもたらせるのか。

この論文においては、キリスト教宣教の変遷と宗教間の対話・協力について概観し、その関係性の変化における宗教間の絆の創出の可能性について、上記の課題を念頭に置きつつ考察する。

キリスト教における宗教間の対話や協力についての議論は、欧米の背景の中でなされることが多く、圧倒的なキリスト教社会の中でなされてきたものである。またその中でなされてきた宣教神学も、自国における宣教についての理念ではなく、宣教地における他宗教をその研究対象として宣教的にどのように考えるべきであるかということをその出発点に持つ。

日本においては、むしろキリスト教宣教は、他宗教社会の中でキリスト教はどのように存続していくべきであるのかということに主眼点を持っているために、欧米の宣教学とは若干その方向性が違っている。欧米の神学を日本の状況の中で批判的に読みつつ、宗教間の絆について考察を進めていきたい。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

一　宗教間の絆の実践

1　平和活動を中心に

日本は、すでに様々な現場において宗教間の対話・連帯が存在している。家族内に様々な宗教が共存していることがある。また地域の中にも様々な宗教が協力して、祭りを行っていることもある。たとえば、様々な宗教が共存している神戸の三宮山側、北野町周辺では、一九八一年よりユダヤ教のJ・グラック氏の提唱によって、北野神社を会場に「心の国際交流」を目指して北野国際まつりが開催されている。三〇年以上の取り組みの歴史があり、この祭りの中で行われている「ピースセレモニー」では、ユダヤ教、イスラーム、ジャイナ教、ヒンズー教、仏教、神道、カトリック教会、ハリストス正教会、プロテスタント教会などの代表が参加し、それぞれのかたちで平和のための祈りが共同でささげられている。(4)

このような地域的な平和活動を中心とした宗教間対話や連帯は、国際的な宗教者の宗教の枠を越えた活動に触発されて行われているものである。

全国的な、さらに国際的な宗教間の協働は、特に戦前・戦中における戦争協力への懺悔と、宗教者における平和運動において展開されていった。(5) 一九四六年一二月一三日には、神道・仏教・キリスト教の各宗教団体の連合体であった日本宗教連盟と、神道教派連合会、仏教連合会、日本キリスト教連合会、神社本庁、宗教文化協会が共催で、全日本宗教平和会議を開催することを決定している。一九四九年一二月ガンジーの意志によって開催された世界平和者会議には、三〇を越える国々より宗教者を中心に約一〇〇名が参加し、日本からはキリスト教の関屋正彦

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

（日本友和会）、仏教の中山理々（仏教讃仰会）が参加している。

その後、一九六一年に世界宗教者平和会議が催され、米・ソ・中・朝鮮・東西ドイツ等一六ヵ国の宗教者四七人と日本代表二二八人が参加し、軍備全廃・原水爆禁止・核非武装について協議され、内なる心の平和と外なる世界の平和の結合を訴えた「京都宣言」が採択された。この「京都宣言」に基づいて、一九六二年には仏教、キリスト教、神道の各団体と京都・大阪・岡山等の地域組織および宗教青年平和協議会が参加して日本宗教者平和運動協議会が結成されている。

その他、平和をつくりだす宗教者ネットや、そこから発足した「宗教者九条の輪」などの平和運動も各地域で広まっている。

現在、平和は宗教が創りだす絆のための重要なモティーフとなり、世界規模で、また日本各地で宗教の枠を越えて協力し、平和の実現に向けての様々な宗教者の取り組みが展開されている。

2　震災・被災者支援

宗教者による平和のための活動から生まれてきたこととして、一九九五年一月一六日の阪神・淡路大震災、そして二〇一一年三月一一日の東日本大震災が一つの契機となり、宗教者が協力した被災者支援の活動が広がっている。

一例を挙げるならば、神戸においては現在もカトリック教会と仏教による合同の大震災追悼儀式が行われている。カトリック教会の祭壇に「阪神淡路大震災犠牲者各位位牌」と十字架が飾られ、地震発生時刻の五時四六分に山伏によってほら貝がならされ、聖書朗読、賛美歌、般若心経が唱えられ、焼香が行われている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

多くの犠牲者を出した震災において、宗教者がいったい何が出来るのかということは、宗教者に問われていることである。東日本大震災においても募金やボランティア活動とは別に、遺体の仮埋葬に際して、仏教界が宗派を問わず、合同で読経をしたり、神父や僧侶らが協力して被災者の心のケアに当たっていることが報道されている。(6) 大きな震災を経験し、様々な苦しみを担って生きていかなければならない人々のために、宗教者でなければ出来ないスピリチュアルなケアもあり、祈りや礼拝、法要という宗教的行為の意味が問われている。さらに、各宗教の布教よりも被災者支援が重んじられることにより、宗教や宗派の垣根を越えた協力活動が実施されている。

3 「平和は○○教の当然の使命である」

おそらくほとんどの宗教が平和についての理解を問われたならば、「平和は○○教の当然の使命である」と答えるであろう。各宗教の信仰はそれぞれ異なるけれども、それぞれに平和思想を持ち、世界平和のために団結すること、信教の自由を尊重し、そのために協力し合うことに異義はないのではなかろうか。平和は宗教者を結びつけると共に、互いに理解し合う場を創り、絆を生み出してくるものである。(7)

二 宗教の違いを凌駕するスーパー・イデオロギー

以上のように見ていくと、確かに宗教の枠を越えて、宗教を舞台として人間と人間とが結びつき、協力し合う可能性と実践がすでに存在していると言える。

しかしながら、日本の歴史を顧みるとき、そうした結びつきがはたして宗教から出たものなのかというところに疑問が残る。むしろ宗教の違いを凌駕するような出来事、もしくは宗教の違いを上回るスーパー・イデオロギーに

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

よってもたらされたものではないのか。そこでは、自分たちの持つ宗教性が失われ、ないがしろにされながらも、自らスーパー・イデオロギーに追従することによって形成されてきた絆ではなかったのであろうか。

平和は宗教を結びつける力を持ち、またその絆を結び、強めていく場である。しかしながら、日本の歴史の中で、平和に反する戦争協力、またそれを支えた天皇制イデオロギーによって宗教者の絆が結ばれてきたことも、一つ時代の警鐘として忘れてはならない。各宗教はこぞって侵略戦争に荷担し、それを各宗教の教理的にも正当化してきた。[8] 少数の戦争反対者はいたものの、各宗教が戦争を是認し、その勝利のために祈り、いかに自分たちの教えが天皇制に矛盾しないものであるかを主張してきた。

浄土真宗の真俗二諦論を臣民思想に置き換え、浄土に生まれることに関しては阿弥陀如来に仕えるが、この世においては天皇に仕えるべきであると主張し、天皇制を擁護してきた。また、キリスト教においても「日本的基督教」が主張され、キリスト教がいかに天皇制に矛盾するものではなく、むしろ天皇制を完成させることが強調されてきた。

また天皇制家族国家が主張された時代においては、家というものが、それぞれの宗教の違いを凌駕するものであり、各宗教者も臣民というカテゴリーの中に収められてきたことも忘れてはならない。各宗教が戦争や天皇制の正当性を主張し、「八紘一宇肇国は〇〇教の当然の使命である」ということを唱え、宗教報国に邁進してきた。

そのようなスーパー・イデオロギーは宗教の違いを超えて、絆を創りだす力を持つものであることを忘れてはならない。おそらく、その時はそれが「平和」を生み出す宗教者の絆であると理解されていたのであろう。しかしながら、スーパー・イデオロギーは、各宗教の本質を狂わせるものであり、宗教間の絆を生み出し、ナショナルな連

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

帯を生み出していった。政治的な方向性や共通の経済的利益を生み出すために宗教が用いられてしまうこと、また宗教自らその僕となるという危険性を我々は覚えなければならない。

そのためにも、宗教ははたして本当に他の宗教と絆を創りだすことが出来るのか。絆を創りだしていくことがいったい自分たちの宗教にどのような影響を与えるのかを問うてみなければならない。その上に立って、いわゆるご近所づきあい的な絆ではなく、その宗教の本質的なあり方として、他の宗教との対話・連帯を意義付けていく必要がある。

ただその一方で、そのような宗教思想的なことではなく、現に存在する宗教間協力体制や事業に可能性を見出し、それを推し進めていくことの方が大切であるともいえる。確かに、思想的な解決を待つことによって、実際進められている宗教間協力体制が制御されたり、制限されたりすることは非常に残念である。むしろ、そうした現場や共同事業を推し進めていくことによって、実態として絆を深めていくことも大切であると言える。しかしながら、我々はスーパー・イデオロギーによって我々の本質を見失ってきたことへの反省に立ち、本質を失わない、絆の可能性を、キリスト教の立場から探っていきたい。

三　キリスト教は他宗教との絆を創りだすことが出来るのか？

宣教的宗教のキリスト教の立場から言うならば、他の宗教と共存し、協力してきたわけではない。

そもそもキリスト教以外の宗教者に対しては、異邦人、異教徒というカテゴリーが適用されていた。そこには、キリスト者と異邦人という二分法が存在した。(9) 人間を、キリスト教徒かキリスト教徒でないかという基準で分類す

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

るという人間理解がある。それはキリスト教側から言うならば、人間か人間ではないかという二分法であった。イエスの宣教活動を記した福音書においては異邦人に対して若干開放的ではあるが、ユダヤ人と異邦人との区別は明確に存在し、異邦人に対する蔑視をも見出すことが出来る。

イエス以降の教会は、ユダヤ人社会に留まるのではなく、パウロを中心として、異邦人世界へと宣教に出かけ、キリスト教を広めていった。その中で、もはやユダヤ人と異邦人との区別はなくなったのであるが、教会は神の民と自分を同一視したため、キリスト教徒と異教徒という対立を生み出す結果となった。救いが民族の壁を越えて「すべての人」に及ぶものであるという神学から、キリスト教が異教社会へと広まっていくにつれて、異教徒や異教的信仰や慣習と断絶することがキリストへの信仰と見なされるような傾向も強まり、キリスト教徒と異教徒いうまた別の二分法が強まっていった。

わたしたちも皆、こういう者たち（異教徒）の中にいて、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、ほかの人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。

（エペソ二・三）

その後、東西ヨーロッパの拡大、イスラム諸国との対立、大航海時代における世界宣教の広がりの中で他宗教との対立はいっそう激しくなっていく。さらに、東西キリスト教のコミュニケーションの困難さも相まって宗教上の離間も進行し、さらに西ヨーロッパ・キリスト教内の分裂は差別、迫害、宗教戦争にまで発展するものとなっていった。一六世紀のカトリックとプロテスタントの決裂も、一九九九年一〇月三一日になってようやくルター派世界連盟とローマ・カトリック教会が「義認の教理に関する共同宣言」に調印し、カトリック教会も信仰によって福音

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

を理解することを公式に宣言した。この宣言では、トリエント公会議による信仰義認主張者への断罪はルター派教会に適用されず、またルター派による信仰義認否定者への断罪はカトリック教会に適用されないと定められた。

四　キリスト教における可能性――宣教神学の変遷――

それでは、唯一神教であるキリスト教自身は排他的な宗教であり、今日わたしたちが取り組んでいる課題に対しては、表面的には理解がある態度を示していたとしても、本質的なところでは否定的なのであろうか。キリスト教そのものの中に、他の宗教と絆を結び、それを深めていく可能性はないのだろうか。

宣教の神学は他宗教をどのように理解するかということと連動して、変化してきている。もちろん、その変遷は単純なものではないが、大まかな変化をたどっていく。キリスト教の宣教学、また宗教の神学においてこの問題が取り扱われてきており、その理解は時代とともに変化してきている。宣教学のキーワードに注目するならば、次の四つの段階に分類されるであろう。

（1）特殊主義もしくは排他主義　この名前の他に救いはない。tabula rasa method

（2）包括主義　救いの恵みは教会の外にもある。Indigenization

（3）多元主義　多様に具現化される神の存在　Inculturation

（4）Inculturation から Interculturation

このいずれもキリスト教の側から他宗教の価値を評価してきたキリスト教宣教学における議論である。その変遷を批判的に検証し、宗教を越えた協力を可能にする神学の可能性について考察する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

いわゆるあらゆる宗教における宗教一般、他宗教に対する共通認識というものは不可能である。ここではキリスト教における他宗教理解を宗教学の共通認識にしようとするのではない。各宗教において他宗教をどのように考えるのかということが、他宗教とどのように絆を結んでいくかということへと関わるものであり、また、その絆を結んでいこうとすることによって、自己の他者理解というものが修正される。他者理解というのは、自己の中にある他者に対する認識を改めるということだけではなく、自己理解にも影響を与えるものであり、他宗教をどのように考えるかということは、自己理解への問いかけでもある。

キリスト教にとっても、他の宗教をどのように認識するかということは、キリスト教自身をどのように理解するかということと密接に関わっている。他宗教との絆というものも、当たり障りのないところで、いわゆる地域の問題解決のためだけのナショナルな宗教間対話・協力にとどまるものではなくなった。グローバル化した社会の中で、民俗・文化・地域共同体という枠を越えたところでの宗教間対話・協力が必要であり、その実現のためには、自己変革を視野に持つ他者理解を念頭に置かなければならないであろう。自己変革を意味するのは、他者にあわせた自己変質ではなく、自らの宗教をさらに深化させ、豊かな自己理解を導き出すことである。

以下、ここ一〇〇年のキリスト教における他宗教理解を批判的に検証し、その他宗教理解がどのような宣教理解と実践に結びついてきたのかを振り返り、今後の宗教間対話・協力の可能性について言及したいと思う。

(1) 特殊主義もしくは排他主義　この名前の他に救いはない。tabula rasa method

もともと、キリスト教においては、新約聖書使徒言行録四章一二節「他に誰によっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」と書かれているよう

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

に、またキプリアヌスが「教会の外に救いはない」と主張したように、多神教社会の中でキリスト教だけが唯一救いに至る道であることを主張し、他の宗教における救いの可能性を否定してきた。

この自己理解とヨーロッパ諸国の経済政策と帝国主義・植民地主義が結びつき、キリスト教の世界化を目指した宣教が、一九世紀に全世界的に展開した。

西洋文化を取り入れさせることが、キリスト教宣教と表裏一体のものであり、その土地の文化や宗教を一掃し、その上にヨーロッパ・キリスト教文化を覆い被させること、つまり tabula rasa method[10] が宣教方策として用いられていた。

特に日本におけるプロテスタント伝道は、アメリカのピューリタンが主導的であったため、欧米のキリスト教以外の文化や宗教を排除して、その上にキリスト教を教える tabula rasa method を実践した。具体的には、日本の祖先崇拝や死者儀礼、仏壇や神棚を偶像礼拝・邪教と見なし、キリスト者になるものはそれを否定し、人々の面前で破壊することが求められた[11]。

ここに、神は真理と命をただイエス・キリストのみにおいて啓示したのであり、救いはイエス・キリストにおいてのみ可能であるという理解がある。他の宗教の教理や伝統の中には、キリスト教が絶対と主張する真理は存在しない。

（2）包括主義　救いの恵みは教会の外にもある。Indigenization

包括主義と呼ばれる他宗教理解においては、キリストによる救いの絶対性は主張しつつも、それにもまして神がすべての人を救われようとする意志を持っていることを強調する。それゆえ、神は他宗教の中にも真理の要素を示

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

しているという考えである。ただ、その宗教の信者はその真理が一体何であるのかを知らずに、神の恵みを経験しているのであって、「無名のキリスト者」と呼ばれている。

しかしながら、根本的にはキリスト教が他の文化や宗教に対して優位に立っていることは変わりなく、同等のものであるという認識はない。

キリスト教は宣教において、そのような文化や宗教と出会うのであり、その宣教の場において、キリスト教は自分たちの西洋神学を修正することなく、一つの譲歩として宣教地の「異教的価値観に汚染されていない」[12]文化的要素を信仰の表現として取り入れることを認めてきた。キリスト教の核心としての実を変えることなく、その様式としての殻を宣教地の文化に順応させようとするものである。

そのような宣教方策は、カトリックでは適応（Adaptation）、プロテスタントでは土着化（Indigenization）と呼ばれた。

日本におけるキリスト教葬儀の変遷を辿ってみるならば、仏教的な死者儀礼の要素がキリスト教葬儀の中に取り入れられていることが明らかである。しかしその根本において、キリスト教葬儀自身が変わることは意図されておらず、日本における「しかたがない」一つの譲歩として、絶えず「異教的要素の混入」に警戒しつつなされていった。

ここではキリスト教と他宗教との対話が試みられているようでありながら、文化的要素・宗教的要素という言葉が示しているように、西洋の啓蒙主義的な考えに基づいて、それらの要素はキリスト教の好みや必要に従って宗教や文化本体から切り離されて用いることが出来ると考えられている。このような考えに対して、要素と本質が切り

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

離され、一要素だけを拒否反応のない中立的なものとして移植することが出来るのかという問いが投げかけられる。

（3）多元主義　多様に具現化される神の存在　Inculturation

キリストの救いの絶対性が問題であったのに対して、神の救いの意志の普遍性に強調点が移ってきた。多元主義的な他宗教理解においては、キリスト教に示されている神の救いの意志は、他宗教の中にも普遍的に示されていると考える。「神的存在の概念は人格的な神的存在として多様に具現化」していると考えられる。

この多元主義そのものがキリスト教の宣教理解に影響を与えたわけではないが、この多元主義の背景にあるヨーロッパ中心主義のキリスト教理解、宗教理解の崩壊、もしくは非ヨーロッパ圏における、つまり被宣教国のキリスト教のヨーロッパ・キリスト教からの解放が、宣教理解へ大きな影響を与えるものとなった。

もちろん、この背景には第二次世界大戦後の植民地政策の終焉、世界そのものが多元的社会になってきたことがあり、一元化されたキリスト教ではなく、多元的なキリスト教のあり方が模索されるようになった。それぞれの文化には、それぞれのキリスト教があり、それぞれのキリスト教が成り立つためにはその土地の文化や宗教との対話は避けることのできないという理解である。この文化や宗教との対話を通して開花する新しいキリスト教のあり方をInculturation（文化内開花）と呼び、積極的に評価しようとするものである。

もちろん、このInculturationと呼ばれる宗教的現象は、ここ数十年において始めて起こってきたことではなく、宗教が他の文化や宗教と出会う場所においては何らかのかたちで他文化・他宗教的要素の混入による変化が生じてきたと言える。しかし、これまではそれをシンクレティズム（宗教的混交）と否定的に評価してきたことに対し

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

て、むしろ Inculturation として積極的に評価しようとする宣教理解である。

Inculturation という宣教理解においては、宣教とは、非キリスト教者を改宗させ、キリスト教者にすることではなく、共に生活する中において、対話し、連帯し、その中で自らの宗教の真理性を証ししていくことを第一義とする。

キリスト教的には、キリストが人間の体に Incanation（受肉）したことが、この Inculturation の根本的な考えとなり、キリスト教の福音が文化という体に受肉するということは、キリスト教宣教の根本的なあり方であると言える。

この宣教理解において、キリスト教は他宗教との対話、協力、連帯への道が開けてくる。キリスト教が他宗教の要素を取り込むのでもなく、また神の普遍的な救済意志によってそれぞれの宗教の境界をぼやかすのではなく、自分自身の真理というものをしっかりと持ちつつも、目の前にある文化と対話することを通して、自らも豊かになり、キリスト教の福音の真理性の新しい側面をその対話を通して発見しようとするものである。さらに、その対話は一方通行的なものではなく、相互に影響を与え合うものであり、対峙する宗教や文化への尊敬というものに立ったキリスト教側からの影響をも否定されるものではない。

（4）Inculturation から Interculturation

Inculturation が、福音の受肉という独自のダイナミズムによって動機付けられているならば、Interculturation は福音のダイナミックな運動に対する教会の積極的な宣教的共鳴であるとして特徴付けられる。ドイツの宣教学者ズンダーマイアーは、「Inculturation は独自の現象ではなく、相互的な現象であり、宣教しようとする二次的な文

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

化にも影響を与え、それを変化させる。成功したInculturationはInterculturationに至る[13]」と主張する。Inculturationの成功の前提となるのは、他の宗教を誠実に受け止め、自らを開き、互いに影響を受け合う準備があるという姿勢である[14]。他の宗教に対する優越性からでもなく、また社会的に支配的な宗教やイデオロギーに対する意図的な接近によっては、Inculturationは成功しない。なぜなら、これらは福音の独自なダイナミズムではなく、協調性のない接ぎ木にすぎないからである。

インドの神学者Francis X. D'Saは、Interculturationに関して「開放性」を強調し、Inculturationの場を明確に示している。「開放なくしては宗教が結びつく通路は不可能である。その出入口とは独自の開放性の具体化である[15]」。彼が言う開放性とは、全く自身を開放しきってしまうことではなく、「それぞれの境界線の独自性を担うものである[16]」。キリスト教にはキリストの境界線がある。仏教には仏教の別の境界線がある。Inculturationとは、この境界線を取り除いてしまうことではない。しかし、それぞれの境界線にはそれぞれの通路があり、その通路を通じて、宗教が互いに関係を結び合うことができるのである。D'Saが言うように、この通路とはそれぞれの宗教が持っている独自の開放性の具体化である。福音の受肉としてのInculturationはキリスト教に独自の開放性を与えたと言える。それは他の宗教や文化に対する一般的な通路ではない。キリスト教は、福音によって開かれた他の宗教や文化への独自の通路を持っている。

このことは、イエスの奇跡物語との関連で明確に示されている。マルコ七・二四―三〇には、悪霊を追い出す物語が記されている。シリア・フェニキア出身の一人の女が、人目を忍んでイエスを訪問し、自分の娘の癒しを願った。しかし、イエスは彼女がユダヤ人ではなく、外国人（異邦人）であるという理由から、彼女の願いを拒絶し、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

「まず、子どもたちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」（七・二七）と語った。このイエスの言葉と態度は排他的である。イエスの行為はある特定のグループ、つまり、イエスの言葉に従うならば排他的にまずイスラエルの家の子どもに向けられたものである。しかし、この物語の結末では、イエスはフェニキア人の願いを聞き入れ、娘を癒している。これはイエス独自の開放性に基づくものである。つまりイエス自身が当時の社会の中で差別され、抑圧されていた人々に自らを開き、その人々と関わり、イエスの言動において神の救い、闇からの解放（ヨハネ一二・四六―四七）をもたらしている。イエスは、当時汚れている、神の救いから遠いと言われていた者に触れ、その人々を癒している。徴税人や罪人と呼ばれていた人々と食事を共にしていたイエスの独自の開放性が、ユダヤ人と接触が許されなかった他宗教の女性にイエスに近づく勇気を与えた。イエスの開放性は、シロフェニキアの女性に、彼女にとっては他宗教への通路を開くことになった。そして、それはイエスにも変化をもたらせた。彼女が他宗教の要素（パンくず）を受け入れることと、イエスが自らの開放性を具体化したことが、この宗教を越えた対話を可能にし、双方向的な通路を開くことになった。この物語における双方向性・相互性はまさに、聖書の中に見る Interculturation の例証的な出来事である。Interculturation は、福音がもたらした独自の開放性の具現化であると言える。

おわりに――絆を結んでいく中で――

以上、キリスト教の宣教理解の変遷における宗教間の絆の可能性を概観してきた。その中で強調されたように、宗教を越えて対話し、さらに宗教者同士の絆を結んでいくということは、互いの境界がなくなり、曖昧なかたちで

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

一体化するのではない。自分自身の真理性や宗教性の輪郭をはっきりと持ちつつ、いったい自分の宗教においてどこを通路として絆が結ばれていくのかということを考える必要がある。

しかし、それぞれの宗教の開放性は単に自らが規定するだけではなく、他宗教との協同の仕事の中で、また宗教間の対話の中で明らかにされるものであり、またその通路が開かれてくる。そこに宗教間対話の意義がある。様々な災害や危機、人間の悲しみや苦しみに直面した宗教がその人間に寄り添おうとする時に、自らの開放性と他者と結びついていく通路が明らかになっていくものであろう。

それゆえ、宗教間対話の場は、互いの真理問題ではなく、人間と自然、もしくは人間を含む自然の痛みと悲しみであるべきであり、人間・自然を中心とした神学・宗教学の構築が求められる。自らの宗教の真理性を護教的に守ることによっては、宗教間対話は生まれず、人間や自然の痛みや苦しみにそれぞれの宗教の真理性が問われるような場において、人間や自然の痛みや苦しみに向かい合う宗教の間に生まれてくるものではないだろうか。つまり、人と人との絆を創り出し、人類の平和や紛争の解決に資するためには、それぞれの宗教は他宗教との対話と協働、自己変革をも視野に入れた緊張関係（Interculturation）による新しい神学、自己理解を構築する用意がなくてはならない。

そこでは、希望が重要なキーワードとなってくる。希望というものはまだないものであり、多くの宗教がそのまだないものを語ってきた。しかしその「希望が希望として人々が共有する時、それはまだないが『存在』するものとして、わたしたちの現実となり得る．その意味で希望は社会を変革する原動力となる」[17]。宗教が人間や自然の痛みや悲しみにかかわる中で、現状保持という「幸せ」を語るのではなく、現状の変革を含む希望を語ることによっ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

て、それを人々が共有するという絆を創りだしていくことができる。

それは、絶えず希望を語り続けてきた宗教にしか出来ない業ではないだろうか。宗教が希望を語らなくなってしまった時、宗教はその役割を失ってしまう。

Interculturation によって、他宗教との絆を創りだしていくことは、自らの宗教的使信を明確にすることであり、また信仰のあり方を信徒が自覚的に把握し、実践するチャンスでもある。他宗教に対する対決によって自己の宗教内に絆を築いていくのではなく、対話と協働を通して他の宗教に開かれていく時、そして互いに希望を共有する時、人間の共生の絆へと人々を招いていく宣教が推進されていく。

注

(1) この「大宣教命令」について、「すべての民」とはいったい誰を指しているのかということに関して、単純に人類全体という宣教領域とその目的を表すものではなく、イエスの復活による新しい時代の到来を表す言葉として、マタイ福音書が書かれた文脈の中で理解されなければならないという主張もある。マタイにおける宣教理解については、デイヴィッド・ボッシュ（東京ミッション研究所訳）『宣教のパラダイム転換　上』新教出版社、一九九九年、一〇二―一四七頁を参照。この言葉の聖書学的な釈義を越えて、この言葉が全世界に宣教師を遣わし、世界宣教を導いてきたことは否めない。

(2) カトリック教会は第二バチカン公会議を経て、他宗教への態度を「対立から対話へ」と変えた。諸宗教委員会編『祖先と死者についてのカトリック信者の手引』カトリック中央協議会、一九八五年、九―一〇頁を参照。

(3) 世界教会協議会においても、一九七〇年代に入って、宗教間対話について活発な議論が交わされ、一九七九年に『多様な宗教とイデオロギーに生きる人々との対話に関する指針』(Guidelines on Dialogue with People of Living Faiths and Ideologies, Geneva, 1979) が公にされている。以来、宗教間の関係や対話を促進する様々な神学的・実践的取り組みが進められている。世界教会協議会の宗教間対話についての基本的な指針に関しては、世界教会協議会（村瀬義史訳）『宗教間の対話と共生のために』新教出版社、二〇〇六年を参照。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

(4) 神田健次「神戸のピースセレモニーに参加して」(関西学院大学キリスト教と文化研究センター『RCCニュースレター』No. 19、二〇一一年七月)、一頁。

(5) 戦後の宗教者による平和運動については、森下徹が詳細に報告している。森下徹「戦後宗教者平和運動の出発」(『立命館大学人文科学研究所紀要』No. 80、立命館大学人文科学研究所、二〇〇三年)、一三五—一六二頁を参照。

(6) 毎日新聞二〇一一年四月一四日の記事(http://mainichi.jp/select/weathernews/20110311/archive/news/2011/04/14/20110415k0000m040104000c.html)、産経新聞二〇一一年四月二三日の記事(http://sankei.jp.msn.com/affairs/news/110423/dst1104232032 0043-n1.htm)等。

(7) 日本宗教者平和協議会編『宗教者と平和』新日本新書、一九八四年、一三九頁を参照。ただ、平和を巡って宗教者が分裂していく一面をも有していることも忘れてはならない。第二次世界大戦後の宗教者による平和運動の構築については、前掲、森下徹「戦後宗教者平和運動の出発」を参照。

(8) 仏教、キリスト教諸派が、戦後、第二次世界大戦下において天皇制帝国主義をに荷担し、自らに戦争責任があることを告白、懺悔している。日本宗教者平和協議会編『宗教者の戦争責任 懺悔・告白資料集——再び戦争を起こさせないために』白石書店、一九九四年を参照。

(9) キリスト教徒—ユダヤ教徒・イスラム教徒—異教徒という三分法も使われることがある。キリスト教の立場から、ユダヤ教徒・イスラム教徒を一段低くは見るが、そこにまだ親近性も見ている。しかし、異教徒はそこからさらに低い位置にあるものとしてみられている。

(10) tabula rasa method とは、「何も書かれていない書板」を意味し、白紙の状態の心を表現している。つまりキリスト教宣教において、既存の宗教や文化的要素を人々の心や生活から取り除き、何も書かれていない状態の上にキリスト教信仰を教えるという宣教方策である。一六世紀のカトリック宣教方策から始まり、現代においても他の宗教を否定し、キリスト教の優位性を主張する教派の宣教方策として用いらえることがある。エルネスト・D・ピレインス(佐々木博訳)『出会いと対話からの宣教と福音化』オリエンス宗教研究所、二〇〇二年、一六—一七頁を参照。

(11) Mark R. Mullins, *Christianity Made in Japan*, Honolulu, 1998, pp. 130–131.

(12) デイヴィッド・ボッシュ(東京ミッション研究所訳)『宣教のパラダイム転換 下巻』新教出版社、二〇〇一年、三三〇頁。

(13) Theo Sundermeier, "Vernetzte Verschiedenheit. Zum Projekt einer Interkulturellen Theologie," in Claude Ozankom und Chibueze Udeani (Hg.), *Theologie im Zeichen der Interkulturalität*, Würzburg, 2010, S. 194.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

(14) Francis X. D'Sa, "Religiöse Bildung und interkulturelle Handlungskompetenz," in Thomas Schreijäck (Hg.), *Religion im Dialog der Kulturen: kontextuelle religiöse Bildung und interkulturelle Kompetenz*, Münster, 2000, S. 29–30.

(15) A.a.O., S. 24.

(16) A.a.O., S. 24.

(17) 東大社研編『希望学1　希望を語る』東京大学出版会、二〇〇九年、四頁。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

Indigenization, Inculturation, and Interculturation

NAKAMICHI Motoo

Inter-religious dialogue is an inevitable part of the peace-building process in our society where all parts of the globe are so interlinked and face tension.

However, Christianity is a religion of mission, and it has claimed that it has the one and only truth. A question remains whether Christianity is entitled to participate in an inter-religious dialogue in the first place. At the same time, we should not forget the past history in Japan where a super ideology (Emperor Imperialism) surpressed religions in Japan by oppressing and eventually engulfing them under the requirement of total obedience to this Emperor Imperialism.

We need a new theology of mission if Christianity is to maintain its identity and at the same time deepen inter-religious dialogues and cooperation with other religions.

In the development of religious theology, Christian missiology has changed its key concepts from "indigenization" to "inculturation" and then to "interculturation." There is a possibility of building human bonds and a challenge for the birth of a new theology in the concept of interculturation.

NII-Electronic Library Service